東海大学
機友会々報

東海大学機友会事務局
湘南校舎　動機事務室
〒259-12　神奈川県平塚市
北金目1117
☎ 0463(58)1211(内)4321
印刷　信友印刷株式会社
☎ 03(444)2481(代)

第3回 機友会懇親会開催

本年も第三回機友会懇親会が第三十五回建学祭開催中の十一月三日（文化の日）午後四時より湘南校舎「松前会館」において開催されました。

毎年東海大学学長の松前達郎先生はじめ東海大学同窓会長及び工学部長の萩三二先生にも御出席をいただき御祝辞や御祝儀を頂戴いたしております。

今年は河西会長が海外出張中の為岡田副会長の挨拶で始まり、動力機械工学科および第二工学部機械工学科主任教授康井義明先生の乾杯の音頭によって和やかな歓談へと進行して行きました。

今回で三回目を迎える懇親会は一家族五千円という参加費が示す様に先生方や会員諸氏の御家族単位での御参加を多数いただいており、機友会行事の中でも特に小さな子供達の参加が特徴で、最初はお父さんの母校自慢のつもりで参加したが今年は子供達から建学祭に行ってビンゴゲームにて景品を取るのだと逆に催促をされたと言う話しを聞き、本当にこの行事が定着しつつあると感じられました。

また卒業後数年の会員からは、在学中のコンパにはない各先生方や先輩方の素顔が発見できたと興奮ぎみに話されておりました。

初対面の奥様どうしでお話も大変盛り上がり、お互いに子供の自慢話しか？　亭主の悪口ではないかとハラハラの会員諸氏達e・t・c……

特に御来賓の元東海大学動力機械工学科教授の平塚先生からは機友会へ貴重な篆刻の贈物を頂戴致しました。

それから例年通り康井主任教授によるユニークな教職員の御紹介があり、特に円能寺先生の東海大学十五年勤続と萩先生の東海大学三十年勤続の発表があり、萩先生には動力・第二工機械工学科と機友会で準備された花束の贈呈が在校生の阿部有子さんより行こなわれました。

こうしている内に終了時刻となり今年御参加くださいました人達は十一月三日の懇親会には必ず御友人を数人伴ない再び御出席していただく約束をして、動力機械副主任教授高本慶二先生の音頭による万歳三唱によって締めくくり、お開きとさせていただきました。

機友会の今後の課題について

機友会々長　河西正彦

常日頃、機友会の運営に暖いご協力を頂きましてありがとうございます。

会の歴史も昭和五十六年十一月に発足して以来、すでに九年の歳月が過ぎました。創立当初の会長であった小林　隆氏から、本会の主旨は機械工学科を巣立った者同志が連帯感と親睦を深め、また母校の研究室や先生方とも密接な連絡を保ちながら、互いに発展していくための依り処になるような機関であるべきだと説明されております。その後この主旨にもとづき、会報の発行、名簿の発刊をはじめ、いくつかの行事を開催することになって今日へと引継がれてきました。

今機友会の活動は、予算の制限もあって、会報の発行を年一回、卒業生名簿づくりを四～五年に一回、建学祭に開催する懇親会で精一杯であります。幹事の方には月に一度の例会に出席していただいて、もっと活発な活動方針を打ち出そうとしていますが、限界であります。この根源は、予算不足です。従って活動資金を稔出する何かをしなければなりません。そこで次のようなことが考えられました。

一、卒業時に徴収する十年会費一万円の納入を、先生方にも協力していただき納付率を上げること

一、事業収入を得るための方法を検討する。

ということです。いずれも先生方にご負担がかかることになるかと思いますが、機友会を発展させる必要の意義をご理解いただき在校生に、助成をして頂きたいのです。外部に有る私達は、在校生に会の説明をする機会が乏しく、予算にしばられて会報をどんどん出すこともできず、逆に在校生からは、活動内容がよく解らないと云われてしまうのです。

大学の生活については先生方は日頃在校生にご指導なさっておられることと思いますが、卒業後は、機友会を通じて交流を活発にして母校の発展を期することを説明していただきたいのです。私達は、幸いにも、昨年十一月に在校生との絆を深くすることも考えて卒研ゼミ特集号の会報を先生方のご協力を得て発行させていただきました。毎年の卒業時におくる機友会賞と合わせて、在校生には機友会の存在の良さをご理解いただけたのではないかと思います。しかし日頃の先生方の助成がもっとも効果的ではないかと思われますのでどうぞ宣敷くお願い申し上げます。

さて機友会は、現在熱意有る幹事によって毎月一回主に代々木校舎で幹事会を開催、活発な討議がなされています。その中で基本的には、次の方針が決っています。

一、会報　年一回三月二十五日発行

特集号は「卒研ゼミ」と新たに就職関係を企画する。

一、名簿　本年度中に改定版を発行する。

一、懇親会を恒例として建学祭の十一月三日に開催する。

一、機友会賞を卒業式会場で授与していただくべく学科にお願いする。

一、学科との交流を深め会の維持発展のための協力を求め、またご指導を仰ぐ。

一、会のシンボルマークのデザインを決定する……

等々です。

これらの方針は基本的ですが大きな課題として財務の安定があります。前述の通り予算不足を会費の納入率の向上、事業収入の拡大のほか寄付活動によって収入増を計る方針です。これらの収入は次の計画に費やされます。

一、会報の発行、名簿の発刊の回数を増し会員との交流を深める。

一、地方支部、学生支部の設立費とその運営費に充当する。

一、研究室及び学科の活動に積極的に協力し、交流を深める。

一、会の定例行事をより充実させる。

一、事業収入の拡大で、個人会費の依存に歯止めをする。

一、事務局の専用電話、ファックス等OA機器の設備拡充。

一、専従もしくは準専従者の雇用経費。

一、機友会役員の個人負担を無くす。

これらの課題は手つかずになっています。会員からより会の充実を求められるのは当然です。

幹事会は、財務の安定を計りつつ焦らずに本会の主旨を具体化していく所存ですので一層の協力をお願いするとともにご理解下さる様、重ねてお願い申し上げます。

本年は、三年に一回総会の開催年です。本年十一月三日の懇親会の日に合わせて開催されます。議題は、活動方針の承認、予算案の承認、会計監査報告、等々です。最後に来年三月で任期切れになる会長の選挙が行われます。充実した総会にするため会員諸氏の参加を強く求めます。機友会の発展のための積極的な質疑応答が展開できれば、幸甚です。

最後にあたりまして、来年度十周年を迎える機友会にご尽力いただきました関係各位に感謝の意を表します。

待望のシンボルマーク決まる

会のシンボルとなるマークのデザインを大学の芸術研究所（渡邊雅人氏）へ依頼しておりましたが、挿絵のように決まりました。機友会の頭文字Kをデザインしたもので、左側のどっしりとした太い幹に対し、右側の三角形の部分は会が末広がりに発展することを暗示しており、縁起の良いシンボルである。また、本会報のように一色刷りの場合にも二色刷りのようにみえる効果もねらっている。

今後、会の活動に色どりを与え、各所で活用していくことになると思いますのでご紹介いたします。

Kiyu

あらゆるニーズにお応えする鋭角の頭脳集団!!　（人材募集中）

SOLC　株式会社ソイック

〒150 東京都渋谷区恵比寿西1丁目33番15号　EN代官山ビル
TEL (03)780-5811(代)
FAX (03)780-5819
代表取締役　大原順夫（昭和43年度卒）

- 情報機器システムの調査研究及び開発受注
- アプリケーションソフトの開発及び運用
- オンラインリアルタイム アプリケーションシステムの設計受託
- 制御システム(電力・計測・データ通信等)の開発
- 各種ミニコン使用システムの開発

東海大学と国際協力（タイの場合）

動力機械工学科教授　飯島敏雄

機友会の皆様お元気ですか。また四年生諸君には本日は卒業式を迎えられ誠におめでとうございます。勉強にクラブ活動に、また友と楽しく過ごした大学生活も今日限りですね。四月からはそれぞれ別の道に、新しい世界に入って行くわけですが、大学で得た知識、技術、特に卒業研究で先生方から体得させられた、やる気（意志＝発想）と実行力と纏める力（レポートや論文にまとめる）があれば、たとえ時間がかかってもきっと何事でも成果が出てくると思います。これを肝に銘じて大いに頑張ってくれることを遥かタイのバンコックより祈念いたしております。

実は小生はいまバンコックにあるモンクット王工科大学ラカバンに一九八八年四月より長期出張しております。モンクット王工科大学ラカバンと言われても機友会の皆様には余りご存じないかと存じますが、日本および東海大学とは非常に縁の深い大学なのです。さて機友会の皆様、いま日本はまさに国際化時代を迎えているわけですが、実はタイについては一私立の東海大学が既に二十五年以上も前からこのモンクット王工科大学ラカバンを通じてタイでの国際協力を始めていたのです。そして今それは非常に大きな実を結んでいます。今日はそれを紹介をさせていただきます。

モンクット王工科大学と日本の技術協力

そもそもモンクット王工科大学ラカバンは一九六一年に日本政府の援助（技術協力に関する日タイ政府間協定）によりバンコック市の北方地区、ノンタブリの約一千坪ほどの小さな土地に訓練生わずか二十三名の電気通信訓練センターとして発足し、電電公社（現在のＮＴＴ）から派遣された専門家の方々がそれらの生徒の指導、養成にあたりました。日本政府はその後も継続してＫＤＤやＮＨＫを通じて長期専門家および短期専門家を派遣すると共にタイの生徒を技術研修のために日本に送ったり、さらには機材を供与するなどして多方面から援助を行いました。一方タイ側の自助努力もあって、その後この訓練センターは、工業高等専門学校、電気通信大学と発展し、さらに一九七十年には北バンコック専門学校およびトンブリ専門学校の両校と合併して国立モンクット王工科大学（五年制）となり、そのノンタブリ校舎と呼ばれました。その後一九七一年にバンコック市内の東方地区、ラカバンの約三十三万坪の広大な土地を得、一九七四年には新校舎を建ててそこに本拠を移しました（ラカバン校舎）。さらに一九八六年には独立した新国立大学、モンクット王工科大学ラカバン（以下ＫＭＩＴＬと略称を使います）となり、現在では工学部（学生数約二千名）を中心に、建築学部、農業技術学部、教育学部、理学部をもつ学生数約五千名の大きな大学にまで発展しました。特に我が国がこれまで支援してきた工学部の電気系学科は現在ではタイ国にある十六の国立大学の中でも教育および研究の面でトップレベルにあると高く評価されています。また今ではこれらの学科の教員は周辺の東南アジア諸国の電気通信技術者を集めて電気通信技術に関する研修指導（第三国研修と呼ばれ、今年は第十三回目を開催）を行うまでに成長しました。

ところで、我が国が一九六一年に最初に行った技術協力に関する政府間協定（期間延長を含め合計五年間プロジェクト協力。プロジェクト協力とは、専門家の派遣、研修員の受け入れ、機材供与の三本柱での進める総合的な協力）以来、第二回プロジェクト協力（一九七九年より四年間）、プロジェクトのないときは個別専門家の派遣、あるいは二回にわたる無償資金協力（一九七五年、一九八六年）などいろいろな形でほぼ継続して技術協力を行ってきました。ちなみにこれまで（一九八七年度）までに派遣された長期専門家（滞在一年以上、平均二から三年滞在している）は五八名、日本に研修に派遣された教職員は八十名を越え、また無償その他で供与された機材や建物の総額は六十億円を越えています。まさにＫＭＩＴＬの発展は日本の技術協力の成果といっても過言ではありません。ＫＭＩＴＬのゴーソン学長のみならず、沢山のタイの方々から、ＫＭＩＴＬは日本の技術協力で出来、成長し、今ではタイ国一の工科大学となった、まさに日タイ親善のシンボルだと評価されています。

東海大学とＫＭＩＴＬ

東海大学とＫＭＩＴＬの関係は今から二十五年前（一九六五年）に始まりました。当時指導に当たっていた専門家チームは卒業生の中で優秀な者を日本の大学に編入させ、より高度な学問、技術を修得させて将来の専門学校（また近々通信大学に昇格する話も進んでいた）を担う教員に育てたいと考えました。しかしながら、教育制度（年数や教育内容）の違いなどがあって、当時は日本の国立大学はもちろん、私立大学も編入生に対するその受入態勢が出来ていませんでしたが、積極的に海外交流を進めていた東海大学だけは松前重義総長の英断でそれを受け入れたと聞いています。今でこそあちこちの大学が国際協力ということで競うくらいに留学生を受け入れておりますが、二十五年前では、それも経営も考えなければならない私学ですから本当に大英断だったと思います。これが東海大学とＫＭＩＴＬの最初のつながりです。この四名は先ず半年間日本語研修を行い、通信工学科の三年生に編入し、二年後卒業して母校に戻りその教員になりました。一年から六年後この四名は再度日本に派遣され、東海大学その他の大学の修士課程をも修了しました。いまこの四名の教員、すなわちプラキット、マヌーン、タビン、ナロン先生は、それぞれ副学長、学長補佐、副工学部長、通信工学科主任（元）のような要職についています。その後もこのＪＩＣＡのプロジェクトを通じて本学にはＫＭＩＴＬの教員が続々と電気系の学科に留学生として送られてきました。留学生を合計しますと、学部卒業八名、修士課程修了十八名、また五名が博士課程修了して工学博士の学位を修得しております。また前に挙げた四名以外の先生方も、学長補佐（ジョンコン先生（女性）、副学長は定員二名でその二名とも東海大学卒）、副工学部長（六名定員、その内四名が東海大学卒）、現通信工学科主任、電子工学科主任、コンピュータ学科主任、電子工学研究センター長など、ＫＭＩＴＬの大学本部および工学部の電気系学科は本学卒業生がまさにその中枢として活躍しております。電気系学科における東海大学卒業生の数は二十名を越えていますので、そこでは英語もタイ語も使わず日本語ですべて通じるくらいです。しかし残念ながら私の働いている機械工学科には日本の大学を卒業したタイ人教員は一人もおりません（最近ブラジル国籍の日系の女の先生が外人講師枠（非常勤）で入りましたが、タイに関しては小生の方が先輩です）。

松前総長、松前副総長の叙勲

松前総長は既にその功績を認められ、一九七七年にはモンクット王工科大学から名誉工学博士号を授与され、そして一九八三年にはタイ国王から勲一等に相当する勲章を授与されています。さらに昨年一月松前達郎副総長（学長）も同じく国王より白象勲章を授与されています。松前副総長の叙勲の場合には丁度小生もＫＭＩＴＬにおり、叙勲の席に列席させていただきました。またその祝賀パーテーにはタイ国首相はじめ多数の大臣や国会議員、さらには日本大使はじめ在タイの多数の日本人の方々、それに既に八十名を越える東海大学タイ同窓会支部の諸兄など約一千名の方が出席し受章をお祝いしてくださいました。

機械系の学科にはベトナム、台湾、香港、韓国などの留学生は沢山いましたが、タイからの留学生はほんの数人しかいませんでしたので機友会の皆様には恐らくタイと東海大学がこんなに深い関係に有ったのかと驚かれているのではないでしょうか。事実小生自身もこのような仕事にタッチするまで殆ど知りませんでした。今ではタイで一番よく知られている日本の大学は東海大学だと思います。日本で勉強した人たちの作っている留学生会が有りますが、その幹事八人のうちの四人はやはり本学卒業生です。東海大学の実績をお分かりいただけると思います。正直小生も改めて松前総長の強力に押し進められてこられた国際交流の成果をまざまざと見せつけられている思いです。そして小生も今そのお手伝いを出来るのを非常に光栄に思っています。

機械工学科への協力

今行われているプロジェクトにおける小生の仕事をご紹介致します。機械工学分野の技術協力の目標は、先ず前半は教育体制の確立、後半は研究体制作りとしています。教育体制とは、具体的には機械工学実験と機械設計製図教育を充実することです。驚いたことに最初の調査の時にカリキュラムを見ましたら、我々が通常機械工学の中で最も重要科目と考えている実験が有りません。設計製図についても、一年生に工学基礎製図と機械製図がそれぞれ半期づつだけ、そして三年生に機械設計がありますがその内容をみますと機械要素の設計のみしか教えていないようでした。他の専門教科（講義科目）についてはそれほど特別な意見は有りませんでしたが、実験と設計製図については全く驚かされました。彼らの説明では、専門科目の多くは講義三時間に対して演習が一時間入っており、その演習で実験が教えられるという説明です。しかし実験室を見回してもガラガラで、少しばかり有る装置もほこりと蜘蛛の巣で一杯、とても実験を教えているような形跡はありません。さらには二十名もの学生を一人の教員がどう教えるのか（既に年々学生が増えて二年生は六十名もいます）……一年生の基礎製図は図学や製図規則の講義が殆どで教科書の中のフリーハンドでの演習以外に殆ど図面を描かせていません。一方、一年後期の機械製図では最初から旋盤の様な非常に難しい

会員近況

平成元年、建学祭期間中の十一月三日に行なわれた懇親会への出欠連絡ハガキの通信欄へ寄せられた会員の皆様の近況を掲載します。

今後も順次掲載します。近況をお知らせ下さい。

三十九年度卒

◎小林　隆（機械工学科卒）
（富士通㈱）
少年野球のコーチをやっており当日試合のため欠席させていただきます。皆様によろしくお伝え下さい。（平１年11月）

四十年度卒

◎牧野　駿（機械工学科卒）
（㈱牧野フライス製作所）
出張中の為残念ながら欠席します。海外勤務も終り今後は都合をつけて出席したいと思います。委員の皆様御苦労様です。（平１年11月）

四十一年度卒

◎宮川一光（第二工機械工卒）
（㈲宮川プレス型製作所）
誠に申し訳け御座居ません。当日仕事の為、皆様に宣敷く、御伝え下さい。（平１年11月）

四十三年度卒

◎中田和義（動力機械工卒）
（㈱コパル）
返信おくれました。11／30にはわざわざ電話を頂きまして大変恐縮の至りです。来年は行きたいと思いますので、、よろしく。（平１年11月）

四十四年度卒

◎石原俊明（動力機械工卒）
（石原保険事務所）
11／3は次男の父母会（中学校・3年生）で父親が出席することになっている為。（平１年11月）

◎篠田明夫（第二工機械工卒）
（明通㈱自営）
ごぶさたしております。多忙のため欠席させていただきます。皆様のご健康をいのります。（平１年11月）

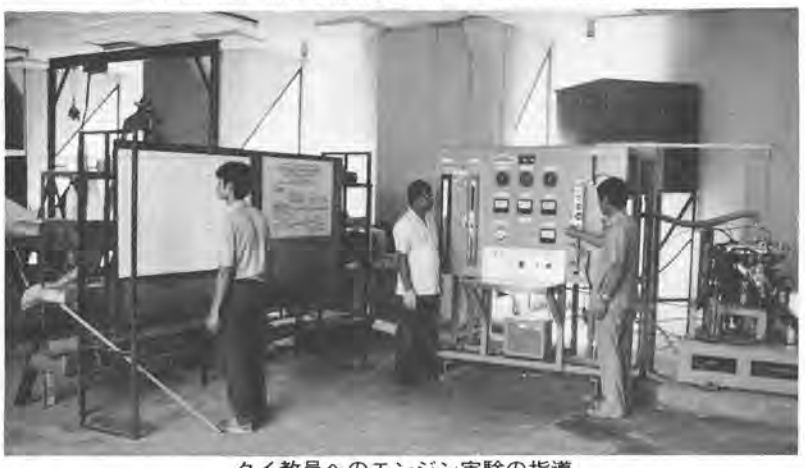
お客様の満足する商品を創造する専門メーカー（自動車・住宅・家電その他、各種専門部品）　（東証２部上場）
橋本フォーミング工業株式会社
本社　〒245 横浜市戸塚区上矢部町320番地　TEL 045(811)1211(大代表)　工場　横浜・館林・名古屋・栃木・福島・九州・藤沢

教材を使って教えています。一年生では機構や製作方法、材料、強度など殆ど意味が分りませんので、図面を描かせているというよりただコピーさせているに過ぎません。また機械要素の講義はしていても実際計算し図面を描かせるということを殆どしていない。さらには機械や装置（例えばジャッキ、バルブ、ウインチ、ポンプ、エンジンなど）などの応用機械設計製図はカリキュラム上にありません。とにかくきちんと製図板の上で図面を描かせることをしていません。理論が分かれば誰でも簡単に描ける、図面は宿題にして家で描かせればよいと考えているふしがあります。いくつか大学を訪問しましたが、実験がないところはKMITLの機械工学科だけですが、設計製図についてはタイの殆どの大学がほぼ同じ様な状態で、製図板だけは大きなものがいくつか（多分学生数に満たない）非常に大きいのがあるのですがどこでもほこりだらけでした。とくにKMITLの場合には調査に行ったときは汚いながらも有りましたが、実際赴任したときには製図板がなくなっていました。今工業化を強力に進めているタイには外国企業がどんどん進出しています。国民総生産もここ数年十パーセントを越える高い成長率を示しています。生産された品物は国内消費は勿論ですが、政府は外貨を稼ぐために輸出型の企業の進出を奨励しています。ミネベア（ベアリングを日本へ）、三菱自動車（乗用車をカナダへ）などは輸出型企業として非常によく知られています。今は殆どの技術が外国からそのまま図面で入ってきてしまいますので図面など描く必要が少ないでしょう。しかしいずれタイ人自身が自力で研究したり、開発したりしなければならなくなるはずです。今は人件費も易いので輸出も出来るでしょう。また国内でもまだ質より量ですから作れば何でも売れます。しかし韓国や台湾の例が示すようにいずれ人件費が高くなったり、消費者の目が肥えてくると質を問われます。しかも大学の場合には今でなく、将来を見すえ、将来を担うような人材を育てなければなりません。自力でものを作ったり、研究したり、開発する、それには機械工学実験や設計製図のような科目はなくてはならないものです。工学の歴史が非常に浅いタイの社会ではこれまで技術、技能に対する社会的評価が低かったという歴史的経緯が実験や設計製図教育など実技教育の軽視に現れたのではないかと思われます。ところでこれを改良しなければ、将来を担うような高等技術者を教育できない、いやそれのみならず、学生実験程度のことが先ず整備できなければ研究なんてとてもとても出来るものではありません。以上のような状況からプロジェクトの前半は教育体制の確立を重点にすることにしました。そして現在カリキュラムの改訂、実験テーマ、テキスト、実験装置の製作、設計製図教材の作成などを行っています。また併せて少しづつですが一部の教員には研究指導も行わなければなりません。大学で非常に狭い範囲の仕事をこつこつ一人でしていたのに比べると、十六人の教員を相手に、しかも熱や流体の分野以外に、材料や加工、制御、メカトロと万能屋になっています。特に学生実験などはやはり先ず材料試験、機械加工などの分野から整備していかなければなりません。幸い二十五年前に小生が東海大学に勤務したときが、やはり機械工学科の創設期で同じような経験をしてきましたので内容そのもので困るということはありません。それよりも考え方もやり方も違う現地の教員に、いかにそれを理解してもらい、いかにして自分達でそれを作っていくようにさせるかということです。先ほど述べたように理論優先の中で育ってきた教員は自分で手を出そうという発想は少ないのです。機械や装置をいじったりするのはヨーロッパのようにテクニッシャンの仕事と考えているところがあります。テクニッシャンが沢山いればそれも可能ですが、数名しかいません。教員も多くは三十代半ばを越えようとしています。しかも個人主義思想が強く、各人の仕事ぶり（教育および研究）に対して全く干渉しないシステムになっているようで、それが非常に教育や研究体制の悪さにつながっているように思えます。学科を皆でよくしようというような発想が有るのだろうかと疑問に思えるときもありましたが、今は彼らは経験がないので何をどうしたらよいのか分からないんだという前提に立って仕事を進めていくことにしています。先ず学期の初めと終わりにしか開催しない会議をできるだけ開催させること、実験や製図については数名で委員会を作らせてテーマや内容を検討させることなど、まさに技術そのものの移転よりもその下の段階からの後押しです。彼らをその気にさせ、自分で修得してくれなければ、移転した技術も専門家が帰るとまた死んで消えてしまいます。実は機材が殆どないと思っていたのですが、実験室の隅や鍵のかかった倉庫の中にいろいろ装置が有ったんです。しかしそれらは殆ど壊れたり動かなくなっています。原因を聞けば、鼠が住み込んでコンデンサーをくってしまったり、線を断線させてしまった、誰かが重いものをおいてガラスの部分を壊してしまったなどです。取扱説明書も殆ど行方不明です。一番の問題はカリキュラムに組み込んで使うようにしなかったことです。今回の供与機材についても、最初はマシニングセンタ、電子顕微鏡、ワークステーションなどを要望されましたが、簡単な数値制御の教育する機械一台ないではないか、ここは大学なのにマシニングセンタで何か多量生産をしようとしているのか、電子顕微鏡よりも先ず目でみる顕微鏡をマスターしなければならないのではないか。パソコンもないのにワークステーションとは、しかも電子顕微鏡やワークステーションも何を教育し、何を研究しようとするのか、それが決まっていないのでは全く使われないで実験室の隅や倉庫に転がって死んでしまっている機材と同じ運命をたどってしまいます。機械工学分野の場合には以上のような状況ですので、既に研究段階を技術協力の主体においている他の電気系の分野に比べますとまさにその二十五年前の段階からの出発です。このようなわけで彼らの自主性を引き出すためには、手取り足取り一諸にやり、またあれやこれやとコミュニケーションの交換をよくすることがまず大切と考えました。たまには下戸ですが酒も飲んだり、それに久々に学生になって絞られましたがタイ語も習わざるを得ませんでした（ごく簡単な会話しか出来ませんが）。

ところで機械工学実験については少し整ってきましたので、融通のつくのを利用して単位を他の科目に振り替えたりして三年生や四年生に一部教えたりできるようになりました。製図の方は部屋がありませんので、昨年着工予定の機械工学の新館を待っていました。しかしそれも建設費の値上がりでいつできあがるのか分からなくなってしまいましたので、先日部屋だけ有って中身のない土木工学科の製図室を協同利用させてもらうことにし、今年度予算で製図機セットをそこに整備することにしました。

研究面については、やはり外国から沢山の企業が進出して非常な勢いで生産活動を行っている現状からして、先ず機械加工や機械材料などからはじめなければなりません。しかしそれは小生の専門とは全く異なりますので、大学より動力機械の林先生、生産機械の西本、橋本および森下先生などこの方面の専門の先生に短期で来ていただき指導してもらっています。また来年度はもう少し範囲を広げて別のタイの教員三名に座屈の研究（材料力学）と自動車の公害の基礎研究、即ち騒音と排気ガス研究をするように勧め、座屈の研究は動力機械の康井先生と粕谷先生、騒音は萩先生、村上先生、前田先生に指導をお願いしています。排気ガスについての研究は小生が面倒を見ています。また年度後半には精密機械工学科の佐藤先生に来ていただき精密加工の研究指導をしていただきたいと計画しています。以上のようなことをしている間にあっと一年半以上も過ぎてしまいました。間もなくその二年目が終わろうとしていますが、学科主任が若くて学科の教員のまとめが難しいこと、三十代の教員がほとんどですが四十代、五十代の教員もいるので小生くらいの年代が出来るだけ長くアドバイザーでいて欲しいこと、さらには一九九十年の夏には日本との技術協力の三十周年行事を盛大に催すのでぜひそれに協力して欲しいことなどの理由から学長から滞在延長の要請をされました。小生としては、余り長くいると浦島太郎になってしまわないかという心配もないではありませんでしたが、供与機材の到着が半年以上も遅れたことや、

白象勲章を受ける松前達郎副総長（タイの新聞から）



タイ教員へのエンジン実験の指導

◎中村修三（動力機械工卒）
（荏原製作所）
ガスタービン使用によるコージェネレーションを勧めています。来年は出席したいと思います。
（平1年11月）

四十五年度卒

◎松波　登（動力機械工卒）
（㈱東科精機代表取締役）
11／4～11／16ヨーロッパ出張の為、前日につき、残念ですが欠席させていただきます。
（平1年11月）

四十九年度卒

◎鈴木房一（第二工機械工卒）
（㈱プリンテック）
現在厚木でプリント基板の製造会社に勤務し、営業をしております。受注産業の大変さをつくづく感じています。皆様によろしくお伝え下さい。
（平1年11月）

五十年度卒

◎井上義孝（第二工機械工卒）
（日野市立日野第三中学校）
当日、明治神宮にて古武道の演武会にでるため出席できません。今後ともよろしくお願い致します。
（平1年11月）

◎中村孝仁（動力機械工卒）
（㈱自動車資料館）
自動車専門誌に執筆する文筆業を営んでいます。
（平1年11月）

◎永井良典（動力機械工卒）
（東電工業㈱）
作業多忙ですが頑張っております。
（平1年11月）

五十四年度卒

◎青木　聡（動力機械工卒）
（㈱気化器製作所）
同窓生とはほとんど連絡等してないのですが、今の会社には卒業生も多く、社内で同窓会を開いております。
（平1年11月）

六十年度卒

◎竹村　彰（動力機械工卒）
（日本航空㈱成田整備工場）
毎度欠席で申訳ございません。成田に居ります上にシフト勤務で、日曜祭日が休めるという状態でありませんので中々出席できません。
（平1年11月）

世界に躍動する
オイルシールメーカー
NDK キーパー株式会社
本社　東京都中央区銀座1-9-8　TEL 03-561-9226
本部　神奈川県藤沢市辻堂神台2-4-36　TEL 0466-33-2111
工場　藤沢，平塚，島根、御殿場

快適な走行を創造する
YOROZU
サスペンション メーカー
事業所
横浜、栃木、大分
福島、山形、USA
萬自動車工業株式会社
本社 横浜市港北区樽町三丁目7番60号
TEL (045)543-6800(代表) 〒222

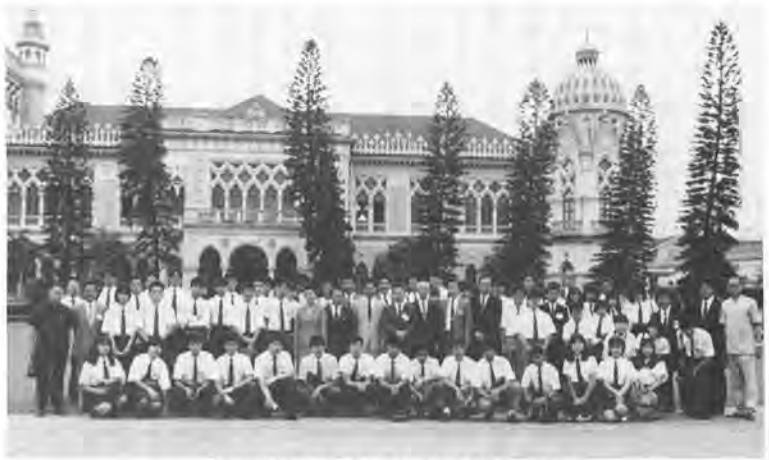
計画段階からこれにタッチしていることもあり学長の松前達郎先生や工学部長の萩先生に相談して一年滞在を延長していただくことになりました。このようなわけで小生は計三年、来年（一九九一年）の四月中旬まで滞在することになりました。

海外研修航海団および萩工学部長のKMITL訪問

昨年三月五日から九日まで、第二十一回東海大学海外研修航海の一行がタイを親善訪問しました。研修団は電子工学科の佐藤和紀教授ほか教職員十一名、学生五十五名からなり、特に佐藤団長は前に述べましたように、前の技術協力プロジェクトで半導体分野指導の長期専門家として三年半KMITLに勤務された先生です。

研修団は三月七日首相官邸を早朝表敬訪問し、その後KMITLを訪問しました。ゴーソン学長ほか多数の東海大学卒業の先生方およびKMITLの学生諸君に出迎えをうけました。研修団とKMITL学生、教職員は早速、KMITLが用意したタイ料理の昼食を共にしながら歓談しました。昼食後はゴーソン学長のKMITLと日タイの技術協力という講演を聞き、その後講堂で歌や舞など双方でいろいろ特技を披露し、時には一緒に踊ったり歌ったり非常に楽しい交歓会の一時を過ごしました。その夜は今度は研修団がメナム川ほとりのホテルで答礼パーティーを開催しました。KMITLの学生教職員は勿論のことそれ以外にも沢山のタイの方々が出席されました。双方の学生諸君は大学での交歓会で顔馴染みになっているので話がはずんだんでしょう。時の過ぎるのも忘れて話し込み、パーティー終了の時が告げられてもなかなか席を立たず、またホテルで出口でさよならをいうのがいかにも名残り惜しそうにしていたのが印象的でした。きっと心にのこるすばらしい交流が出来たにちがいありません。ところで研修団を乗せた望星丸二世号がバンコックに着いたときそれはそれは非常に大歓迎を受けました。先ず船は鼓笛隊の音楽に迎えられて入港し、そして港にはKMITLの教職員や学生は勿論、タイの東海大学同窓会の方々、国会議員、港のある町の町長さんなど非常に多数の方が大歓迎をして下さいました。またこの国会議員と町長さんはその後もわざわざ特別パーティーを開いて下さるなどいろいろ気を遣って下さいました。東海大学同窓会タイ支部の歓迎パーティーもあり、タイ滞在中はまさに自由時間が欲しいというくらい大歓迎の連続でした。実は小生も五年ほど前に、第十七回海外研修の副団長としてニューカレドニアまで行ってまいりましたが、これ程までに歓迎されたことはありませんでした。狭い船内、船酔、きまった食事だけ、長い航海の末にやっと陸地に上がれるだけでも嬉しいのに、それも港で誰か数人でも旗を振って迎えてくれればそれは非常に感激したことを憶えています。それに比べますと今回の歓迎はそれはそれは盛大なものでした。研修団の方々はきっと沢山のすばらしい交流と思い出を持ち帰ったことと思います。

ところでタイ国およびKMITLと本学はこのように非常に深い関係にありますので、東海大学としては今回の研修団のタイ国訪問に際して工学部長の萩先生を学長代理として派遣されました。萩先生は、首相官邸、KMITLなど、研修団の全日程に同行されました。KMITLでは萩先生に対しゴーソン学長が、二十五年にわたる東海大学の協力はまさに東海大学工学部の協力であり、今のKMILLの工学部がここまで高く評価されるようになったのも東海大学の工学部のおかげと深く感謝の意を表されました。実はその半年前にゴーソン学長からは、東海大学の工学部長の先生はまだ一度もKMITLを見られていないので萩先生にぜひKMITLに招待したい、ついては何時がよいかとの相談を受けました。萩先生はいろいろ忙しいのでやはり夏休みごろがいいのではとお答えしますとゴーソン学長は早速萩先生に招待状を出されました。そこで小生は夏休み頃にそれが実現するのではと思っておりましたところ、期せずしてそれが半年早く実現したわけです。また萩先生と一緒に動力機械工学科の主任教授、康井先生もお見えになり小生の行っている機械工学科への技術協力の現状を視察されました。両先生とは久々に、それも期せずしてタイで楽しい酒を酌み交わしました。



首相官邸を訪問した海外研修航海団

ゴーソン学長や本学卒業の教員と懇談する萩先生、康井先生、柴崎校友会室長

河西正彦会長および伊藤和義幹事の来タイ

機友会の皆様も最近は何かと海外に出られている方が多いのではないでしょうか。実はつい数カ月前（昨年十一月）に機友会会長の河西正彦様（レグセル工業）と、この機友会新聞の編集を担当されている機友会幹事の伊藤和義様（東芝タンガロイ）がご夫婦で陣中見舞いに寄って下さり、いろいろ励ましていってくださいました。小生もお礼にわずかに通じるタイ語を頼りにガイドを買ってでて市内観光案内のお供をいたしました。また有馬さん（巴工業）はバンコックに出張されるたび連絡を下さいます。食事とタクシー乗車程度の簡単な会話なら出来ますので機友会の皆様も来タイの節は是非お声をかけて下さい。タイでは一般市中では英語が殆ど通じません。その上タクシーは値段を交渉してからでないと乗れません。しかし最初は非常に高く言ってくるので初めての方は大変です。どうか遠慮しないでご一報下さい。お待ちしています。

タイでの生活

バンコックに赴任した4月はタイの一番暑い時期でした。わずか五百メートル、それも家内と日傘をさして歩いたのですが、途中たまらずにジュースを飲んでひと休みしなければなりませんでした。日本では少しくらい食べなくても、また徹夜しても大丈夫でしたのに、ここに来たら夜九時になると眠くなる、十二時過ぎると翌日体調がおかしい、夜は暑くて眠れず、真夜中にシャワーを浴びてまた寝入る。半年くらいはそんな状態で大分戸惑いましたが今はすっかりこちらの生活にも慣れました。高一の長男と中一の次男、それに家内を同伴しましたが、幸いなことに実際に派遣される約一年半前に自宅でKMITLの先生方にタイの話を聞けたり、また計画段階（事前調査、長期調査および実施閣計画討議などで二度訪タイ）からこのプロジェクトに関係してきましたので、意外と子供や家内の同意を得るのに苦労をしないで済みました。中一の次男は日本人学校があり何ら問題がありません。高一の長男もアメリカンスクールに入り、今ではレギュラークラスに仲間入りしてタイでの生活を楽しく過ごしているようです。それぞれサッカー部、ゴルフ部とクラブ活動の方も楽しんでおります。炎天下をかけずり回るのはやはりタイの少年にかないません。タイの少年とのサッカーの試合で日本のチームが勝ったことがありません。でも次男は休まずに練習にでていきます。長男はタイで初めてコースに出たときにスコアが九十、それぞれ楽しく過ごしているようです。家内もいまは女中さんがいて洗濯と食事の世話から解放されて自由時間がたっぷりですので英語を習ったり、タイ語を習ったりしています。以前は外国からのお客が見えればプリーズ、プリーズのみでしたが今ではイギリス人の家庭教師と二時間以上も駄べっています。驚きです。

小生も湘南と代々木だけの、また学問だけの狭い世界しか知りませんでしたが、今はそれとはかなり異なった世界にいます。ある意味では世界の動きが感じられます。これからの時代を考えると小生も家内も子供たちも皆非常に貴重な経験の場が得られ、今回の長期派遣はいろいろな意味で良かったと思っています。

思い付くままに冗長に綴ってしまいました。機友会の皆様には帰国までにもう一度新聞でお会い出来るかもしれません。いやそれよりもタイでお目にかかりましょう。連絡をお待ちしています。

勤務先
King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang,
Ladkrabang, Bangkok 10520,
THailand
Tel. 326-9085（直通）
自宅
11 B, Grand VilleHouse 11,
25 Sukhumvit Soi 19,
Bangkok 10110, Thailand
Tel. 254-4379

◎**新田浩典**（動力機械工卒）
（アンリツ㈱）
当日会社の同期の仲間で旅行に行くので残念ながら行けません。
（平1年11月）

六十一年度卒

◎**稲森　潤**（動力機械工卒）
（富士重工業㈱）
設計第3部機構設計第2課所属乗用車のアクスル関係の設計をしています。（平1年11月）

六十二年度卒

◎**四野宮直樹**（第2工機械工卒）
（協和合金㈱）
機械工学科でも四年次のカリキュラムに選択科目として「品質管理」（統計的解折）を入れた方が良いと感じています。
（平1年11月）

五十年度卒

◎**伊藤正夫**（動力機械工卒）
（日本精工㈱）
サービスエンジニアとして北欧を担当して居ます。
NEDERLAND 在住
（平1年11月）

住所変更の連絡を!!

「会員名簿」を平成三年三月に改訂出版すべく、現在鋭意準備を進めています。

前版では索引がないため使いづらいと不評でしたので、できるだけ正確に、できるだけ使い易く、をモットーにしてデータ収集につとめております。

変更のあった方、是非事務局までご連絡下さい。尚、同姓同名の方がいますので卒業年度およびふりがなを必ずお書き下さい。

総会・懇親会へぜひ御出席下さい!!

本年平成二年十一月三日には総会が湘南校舎で行なわれることが予定されております。当日は建学祭期間中で、いろいろな催しが企画されているようです。また、総会の後は恒例となっている懇親会が恩師を囲んで行なわれます。ぜひ御家族連れでご出席下さい。

平成元年度 機友会賞表彰者

特別賞

60MD1213 柏木正樹　康井研
60MD2145 美濃部充好　粕谷研
60MD3210 小木泰一郎　萩　研
60NM1110 大島睦実　第二工

機友会賞

80MDM008 加藤勝広　林　研
60MD1147 森　啓一　佐野研
60MD1201 浅見秀樹　小林研
60MD1210 大木孝雄　浅沼研
謝恩会幹事
60MD1224 白崎喜也　萩　研
60MD1252 有賀　靖　川島研
60MD2112 小野善治　斎藤研
謝恩会幹事
60MD2114 神杉健治　斎藤研
60MD2121 佐々木拓次郎　林研
60MD2125 杉田尚之　浅沼研
謝恩会幹事
60MD2129 竹中　肇　粕谷研
謝恩会幹事
60MD2233 生井一憲　佐野研
60MD2236 花澤　彰　中川研
謝恩会幹事
60MD2237 菱山　徹　鈴木(曠)研
謝恩会幹事
60MD2242 増渕　浩　斎藤研
51MD2265 本堂　誠　田中研
謝恩会幹事
60MD3102 石原正伸　井ノ内研
60MD3113 小島　修　萩　研
60MD3130 永井　清　鈴木(曠)研
60MD3213 北山和弘　田中研
謝恩会幹事
60MD3214 久保山浩一　國本研
謝恩会幹事
60MD3220 島田憲一郎　福迫研
謝恩会幹事
60MD3227 田沼幸文　萩　研
謝恩会幹事
60MD3229 中村孝司　康井研
謝恩会幹事
51MD3245 高橋　寛　川上研
60NM1118 川路達朗　第二工
60NM1132 白間直人　第二工
60NM1149 増田勝憲　第二工

願う事から始めよう！

伊藤和義
（機械工学科　四十年度卒
東芝タンガロイ㈱勤務）

私の趣味の一つに囲碁があります。

20代より始め、今は2段になっており、会社で囲碁部を創設した時は15名程度でしたが現在は60名の大所帯にふくれ上りました。囲碁を通じて出来た仲間は付き合う以前では発見できない色々その人の側面を見せてくれます。

そして碁盤を通じ碁石を打っていると互いに黙しても語り合えるものです。ある人は、これを「手話」とも云っております。

芸事には古より守・破・離と云う言葉が使われますが、此の意味を簡単に説明致しますと、「守」とは原則的な事、あたりまえの事、つまり基礎をマスターした姿を指します。

「破」とは「守」に応用を加え技をさらに磨いた姿を云います。

「離」とは従来よりかって無い独創性の技を「破」に加え達人となり自己の流派を築き上げた姿を云います。

この「離」は一握りの名人、達人、超一流の学者等で、我々凡人には縁遠い姿です。そこで私は此の守・破・離をもっと優しく解釈してみたいのです。

つまり「守」とは、願うことが始まりなのです。

例えば、すばらしい女性を妻としたい、ゴルフを趣味としてマスターしたい、自分の家を持ちたい、会社の社長になりたい、など、などであります。

現代は情報があふれ、多くの物が規格、標準化され、誰でも自分の未来がある程度見え、予想が付け易い状況なのです。そして夢とか、希望とか、願うことが薄れて来ているのです。

だから　大きく持ちましょう「願うことを、」それが「守」です。

そして少し苦労しようではありませんか。その大きさが、その道程が長いほど、朝（アシタ）の楽しみ、喜びが大きく深いものとなるのです。

囲碁を例に上げますと、まず囲碁を自分の趣味としてものにしたいと此れを強く願うことです。これが「守」です。そして囲碁の本とか囲碁雑誌より定石等を学び、同じ学ぶ仲間と碁を打ち、碁敵を作ることです。これが苦しみです。だけど楽しみに替るはずです。これが「破」です。次に世間一般に通じる「段」つまり初段、2段、3段～最終6段に挑戦することです。これが離です。真に簡単なことです。だから願うことです。

趣味に生きる

建学祭期間中の11月3日に家族づれでなごやかに行われた懇親会に、昭和55年3月にご勇退された平塚　喬先生がお元気でご出席になり、その際に、数年来ご趣味とされている篆刻（てんこくいん）印をご持参ご披露されました。ご紹介します。

卒業生の声

人生にも大学を！

岩堀邦男
（機械工学科　四一年度卒
岩堀特許事務所）

昨年昭和天皇が崩御され、後に「平成」となった。この「平成」の出典については、中国の古典の「四書五経」のうち「書経」のなかの「地平天成（地平らかに天成る）」というのがあり、これから選ばれたとのことであった。

その話題の「四書五経」のうち「大学」という書の巻頭に三綱領と八条目ということが述べられている。その中の三綱領を現代風に解釈すると、

①その人なりの個性を伸ばしなさい。

②伸ばした個性（能力）を広く社会に役立たせなさい。

③命ある限り、いつまでも向上に努めなさい。

となる。その「大学」は、いにしえの大学で人を教育する大方針を述べたのであるが、現在の大学教育のみならず、人生の指針ともなる点で共通する。

その①については、私ごとで言えば、幼少の頃から、発明が好きで好きで、ひたすら発明にこっていた。ですから将来は、「何が何でも発明を生かす仕事だ。」と心に決めていた。

従って、東海大学第二工学部機械工学科第一期生として入学後は、夜学であることを最大限に生かすため、昼は、実地での技術の修得を考えながら、各種設計、製作を心がけ、企業にとっては迷惑のかかることが多かったと思われるが、会社、機械設計事務所等を数社勤務した。ここで発明等のセンスを生かせる機会を得、発明、設計の本質の片鱗を得たと確信している。

余談であるが、私の在学中に東京オリンピックが、ましてや東海大学代々木校舎にも近い国立競技場等で行われたが、当時スキーリフト設計の一部をやっていた関係上、現地（金沢市郊外の山）での突貫工事のためオリンピックを全く見れなかったことは思い出の一つである。

現在、「特許（発明）、実用新案、意匠、商標、ソフトウエア等の知的財産を如何に保護するか。生かすか。」という弁理士（簡単にいうと、特許等に関する弁護士的な職業である。）の職についている。これは、幼少の頃からの夢と個性を生かしたものと思っているし、好きな道に進めたことを幸せ者と思っている。

しかし、現在は極めて多くの職業が細分化され、大学の卒業に当たっても、何の職業に就くか、一生をどうするかについて迷うことが多いと聞く。ごくあたり前だが、「やりたい好きな道に進みなさい。」そう言いたい。それは、その人なりの個性を最大限に生かすことができる筈である。それによって苦労も最小限となるし、夢も持てる。

次に、②の伸ばした個性（能力）を社会に役立てること。は極めて大切なことであって、特に、東海大学の建学の精神は、人道主義・人格主義を基調とした教育である。

さらに、私ごとで言えば、特許、実用新案等の知的財産を如何に保護していくかは、私共弁理士の腕にもかかっており、一企業のみの問題ではなく、資源が乏しい日本全体の問題ともなっており、知的財産権を保護する弁理士業の一端を担い、社会に役立ちたいと思っている。また、知的財産権の特許等が関係する先端技術工学部として我国初の開発工学部が平成二年度から東海大学に開設できることは望外の喜びである。

また、③の命ある限り、いつまでも向上に努めなさい。この点についても、建学の精神を創設された我大学の松前総長は、まだまだ、これからだとその精神を日夜追求されている。

これが世間の一般人では、種々の学問、研究等を生涯教育として盛んになりつつあり、人生を研鑽、修行等の場として過ごす傾向にもあることは好ましいことと思える。

さらに、私ごとにもなるが、弁理士の職業は、常に発明と付き合う仕事であり、今日、電気・電子工学関係が絡むことも多くなり、機械専門のみでは理解しにくいこともある。今年、46才になるが、再度、東海大に入ろうかと思っているこの頃である。その時にはよろしく。

以上のように、前記の①②③は、私の言ったことではなく、千五百年以上前の中国古典「四書五経」のうちの「大学」の中での三綱領であり、私の好きな理念であると同時に、目標でもある。東海大学の建学の精神とも併せて、人生にも、「四書五経」の「大学」の理念を生かされて歩まれることを祈っております。

しかしながら人生は、くり返しができません。だから願うと云っても、高齢になってから始めると、それは大変です。人の20倍も、30倍もの努力が必要です。よって若い時に望む事、願う事を強く持つ事が大事なのです。

何事も大きく、強く、多くの事を「願う事より始めましょう！」

株式会社 アツギ金属研究所
〒242 神奈川県大和市福田6-9-22　☎0462(69)1221(代)
業務内容　タングステン系粉末合金　放電加工電極
強電用電気接点　セラミックの開発研究

■ 企画　■ 編集　■ デザイン制作
■ 写植　■ 製版　■ 印刷
〒108 東京都港区白金1－7－20
信友印刷株式会社
TEL 03-444-2481(代)　FAX 03-444-2482

在校生の声

学生生活と会社生活の違い

瀬島幸男
（大学院六二年度卒
日東紡績㈱）

私が大学を卒業して、早くも一年が過ぎようとしています。何もしないうちに過ぎてしまったような気もするし、新しい経験も数多くあったような気もする一年でした。

しかし、入社当時は、かなり大変な日々が続きました。何が大変だったかというと、生活のリズムが学生時代の生活と比べて、全く異なったものであった事です。朝は起きられない、夜は眠れずに、つい夜更しをしてしまうといった具合いでした。これは、早いうちから気を付けておいた方がよいと思います。私と同期に入社した友人も、これにはかなり苦労したようで、遅刻をすることもあったようですが、そのようなことの無いようにしたいものです。

また、現在の生活と、学生時代を比較してみると、かなり違った面があるようです。

学生時代を振り返ってみると、自分のやりたいことを好きなようにやっていたように思います。また、周囲の環境も良かったように思います。特に、入学してからの二年間を札幌校舎で過ごしたことは、自分にとって大変良かったと思います。札幌校舎では、各学科一クラスづつで人数が少なく、同学科はもちろん、他の学科にも友人が多くできたし、先生方とも話す機会が多く大変よい環境だったと思います。友人たちとホバークラフトを製作した事もあり、このときは、先生方にも手伝って頂いたりもしました。この時期は、勉強もある程度はやりましたが、成績などよりも遊んだり、先生方と会話したことなど、今から考えても貴重な時期だったと思います。

その後、湘南校舎に移り、そして、大学院にも進学することが出来ました。これも、自分のやりたいことを素直に行ったからだと思います。大学院では、研究を通して大変多くの事を先生方や、研究室の人たちから学びました。

現在の状況を考えてみると、これまでのように自分のやりたいことを好きなようにばかりは出来なくなっていることは事実です。しかし、そのような状況の中で、どの様に自分なりの個性を持って行けるかが問題であると考えるようになりました。会社でも解決しなければならない問題があるとき、その解決の手段は、卒研等と共通するところがあります。それを生かして、さらに、自分の意見をはっきり持つことが必要だと思います。

あと一点、会社に入って変わった事と言えば、毎月給料がもらえることです。学生の時は、お金とは縁の無い生活でしたが、貰えるとうれしいものです。しかし、その反動か始めのうちはどうも使い過ぎてしまうようです。使い過ぎには注意しましょう。

以上が、私の入社一年目の感想です。最後に、学生時代の友人は大切にしたほうが良いと思います。

卒業を目前にして

竹中　肇
（動力機械工学科
大学院進学）

私が、東海大学工学部動力機械工学科に入学してもう早いもので四年の月日が経ちました。現在卒業を目前にして四年間を振り返ってみるといろいろなことがありました。まず大学に入学する前は、それほど大変ではないと思っていた学業は、いざ入学してみると、予想以上に難しく、入学して三年間、授業、機械製図、機械工学実験などに苦しめられ、特に機械工学実験のレポートの提出日の朝に、疲れきって学校へ行ったことや四年になっての卒業研究では、卒業研究発表会の準備と謝恩会の準備とが重なってとても大変だったことなどが、思い出されます。私は、この四年間の大学生生活から学んだと思うものは、多くの人達との出合いやその人たちと一致団結して何か一つのことを成し遂げることのすばらしさを学びました。このことをいつまでも忘れることなく心の片隅にしまっておきたいと思います。私達は、この三月をもちまして東海大学工学部動力機械工学科を卒業し、就職あるいは進学とそれぞれ新しい自分の道に進み出すわけですが、大学生活の中で得たものを生かし新しい環境のもとで精一杯頑張っていきたいと思います。また、卒業後一人一人がばらばらになるのではなく、四年間にわたって喜怒哀楽を共にしてきた者どうし、より一層の親睦を深めていきたいと思います。幸い動力機械工学科には、諸先輩方が築いてくださった機友会というものがありますので大いに活用させて頂きたいと思います。そしてこの会を通して諸先輩方とも新しい連係を持ち、共に東海大学工学部動力機械工学科の発展に努めてゆきたいと思います。私の場合、東海大学大学院へ進学しますが、在学中あるいは社会に出てからもこの機友会の発展と、親睦のために少しでも役に立てたらと思います。

最後になりましたが、私が幹事長に選ばれて開催しました平成元年度東海大学工学部動力機械工学科謝恩会の折には、機友会役員の多数の御出席と、さらに温かい御言葉を賜り誠にありがとうございました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。そして、私の大学生活に良き思い出を作ってくれた東海大学工学部動力機械工学科の諸先生、先輩方及び同輩の御健康と御活躍を御祈り致します。

卒業式を控えて

北山和弘
（動力機械工学科）

私は総合大学の持つ広いキャンパスや雰囲気に憧れ、東海大学を受験したのですが、入学が許されたのは湘南校舎ではなく福岡教養部でした。福岡教養部はあまり大学とは思えない雰囲気で、入学した当時は何か憂うつなところがありました。しかし日が経つにつれ、友達が増え大学周辺の環境にも慣れ、毎日がとても楽しく感じられるようになりました。また、いろいろなことで悩んだり、苦しんだりした時には、親しくなった喫茶店の店長やその店の常連のお客さんにまで相談に乗っていただき、福岡の環境や人の温さに、福岡という所が好きになりました。こうして入学から二年が経ち、移行式の時には、残りの二年も福岡で暮らしたい気がありました。

湘南校舎に移ってからは、新しい友達や多くの先生方に出会い、今まで以上に多くのことを学び、楽しい生活ができるようになりました。四年生の時には毎日夜遅くまで卒業研究や論文作りに励み、三年生までとは違って充実した毎日でした。このようにして、長いようで短い四年間が過ぎ去り、私達は三月末を特って東海大学工学部動力機械工学科を卒業し、就職あるいは進学とそれぞれの道を歩み出すわけですが、在学中に得たものを生かし、新しい環境のもとで精一杯頑張っていきたいと思います。また東海大学の卒業生であるということを誇れるよう立派な社会人になりたいと思います。

最後になりますが、長い間御支援、御指導下さいました東海大学工学部動力機械工学科の諸先生ならびに先輩の方々に、深く感謝いたします。

広州交易会を見て

機友会々長　河西正彦

去年四月下旬、毎年広州市で開かれる広州交易会を見るため、初めて中国を訪れた。この交易会は中国最大の物産展で、雑貨などの小物から自動車、建設機械にいたるまで、中国全土から出品されている。今回の訪問を思いたったのは昨年、米国を訪れた時のこと。ニューヨークの雑貨屋をのぞいて歩いた際、中国製の品物の多さに強く興味をひかれたからだ。中国には以前から関心があり、歴史書を読んだり、また最近の情勢も気をつけて見ていた。特に七〇年代に行った市場原理導入による経済改革がどれだけ浸透し、人々の生活観に影響を与えているのかを一度、自分の目で確かめてみたいと思っていた。

広州へは香港から直通列車で入った。広州駅ではまず人の多さに驚かされた。一見、目的もなさそうな人々がうろうろしている光景は、今まで漠然と描いていた社会主義国のイメージとはほど遠いものだった。ある人は百年たっても前進のない社会だと言っていたが、この風景だけを見るとうなずけなくもない話だ。

しかし交易会を見学した時、外国の商社マンを相手に懸命に商品を売り込んでいる中国人の姿を見て「今、何かが変わりつつある」という予感めいたものが浮かんだ。それは広州市内の路地裏や市場を歩くにつれ、徐々に実感へと変わっていった。外国人用の兌換（だかん）券を引き換えるレートの二倍で人民券と引き換える、と言い寄る男、質素な身なりで外国人に群がる子供たち。まるで自分の幼いころ、終戦直後の日本を見ているような気分だった。

ヤミ市が開かれ、多額の金銭取引が行われている。そこには中国の庶民の力強いエネルギーが感じられた。今、中国はまさに長江の流れのように静かで大きく、緩やかに、そして確実に前進している印象を受けた。

広州の後は桂林、北京を観光し、地元の若いカップルに案内してもらったり、台湾からきた観光客と酒を酌み交わしたりと楽しい思い出をつくることができた。帰国後、一月あまりしてあの天安門事件が起きた。テレビのニュースを見ながら、旅行中お世話になった方々の顔を思い出しては、複雑な気持ちにおそわれた。だが、今回の訪問でわずかでも中国の流れを肌で感じられたことは収穫であった。今後、中国または近隣諸国との提携を考えるうえでもこの体験は非常にプラスになるだろう。

東海大学機友会昭和63年度会計報告

平成元年３月31日現在

収入の部	（単位 円）	支出の部	（単位 円）
前年度繰越金	3,520,814	事務諸経費	197,160
昭和63年度生会費納入金(162名分)	1,310,000	会報発行経費	734,608
既卒者会費納入金(16名分)	134,120	卒業生勧誘事業経費	70,000
会報5号掲載広告料(6社分)	140,000	幹事会諸経費	72,200
預金利息(横浜銀行分)	5,629	雑費	309,680
		小計	1,383,648
		次年度繰越金	3,726,915
合　計	5,110,563	合　計	5,110,563

平成２年１月27日
上記監査の結果、相違の無い事を認める。

監査
佐々木彰
鈴木良幸

東芝特約店（金属・新素材）
ウエキコーポレーション
（旧社名：ウエキガス科学(株)）
金属材料・新素材・金属ＣＶＤ装置・半導体用ガス・各種設備（設計・施工）の専門商社

常務取締役　清水泰雄（Ｓ43年卒）
米国駐在　日向野保雄（Ｓ52年卒）
本社勤務　奥山俊英（Ｓ54年卒）

本社　〒146　東京都大田区久が原　５丁目33番10号
ＴＥＬ　(03) 753 - 2211　ＦＡＸ　(03)753 - 7117
支店　北関東・相模原　事業所　泉・姫路・北九州・大分
営業所　仙台・埼玉・横浜・大阪　出張所　平塚・浜松